

裏切り異界人は学徒の守護を

ゆずぽん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

十一歳を迎えた少年少女はホグワーツ魔法魔術学校へと入学する。そして今日魔法界の英雄ハリーポッターが入学した。「ハリーポッターを取った！」獅子寮の生徒が歓声を上げた同時刻、別次元で民衆は沸きに沸いていた。

目次

最期の告白

断頭台へ男の首は納められ、斬首を任された年若き騎士が台へと上がる。上がってきた騎士の顔を見ると、男は懐かしいように、笑って声をかけた。

「よお、エノーラ。：積もる話もあるが、まあチャチャッと済ましてくれ」

「私には：：なぜあなたがあちらに着いたのかが未だに分からないよ：：」

「：何もおかしい事じゃない。エノーラ：君がそちらに着いたように、俺はこちらに着いたってだけの話だ。俺が男に生まれたように、君が女に生まれたように：受け入れるしかないものだ」

艶やかな金髪を靡かせ、白い鎧に身を包んだ女性、エノーラはその言葉を聞き、何も言わずに俯く。腰に携えた剣を握りしめ、今この状況を理解できないでいる。

「何故：何故なんだ！君は違うだろう！君は卑怯で野蛮なアルマの奴らなんかとは違うのに：。優しくて：強くて：」

「それは君が俺を十分に理解していなかっただけだろう？君は俺の何を理解して、俺を語るんだ？子供の頃一緒に森で遊んで怪我したことか？ 聖騎士となり苦楽を共にしたことか？ なあ、教えてくれ、エノーラ・サジリアス」

「知らないよ：知らなかったんだ：。君が抱えていた闇も、抱いていた我々への不信感も：不満も。 全部：全部君と向き合うことをしなかった我々がいけないんだ」

エノーラのその言葉に男は一つため息をつく、視線を彼女から外し、下を向く。

「早く首を刎ねろ、そろそろ上が黙っちゃいないだろう」

彼女はその言葉に体を震わすと、少々垂れた青い瞳に涙を浮かばせる。腰に差した剣を抜き、天高く剣先を掲げた。

「：裏切り者 ッウルエラ・ヴァーラル」の処刑を執行する！ この者は我々が祖国ククーダを守護する聖騎士団長でありながら、アルマは

と寝返った大罪人！ よって、斬首刑に処す！」

エノーラが剣を構えると、待つていたかのように副団長が民衆へと叫ぶ。ウルエラは民衆からの罵声をこれでもかと浴びせられる。

「早く殺せ」「ククーダの面汚し」こんなものはウルエラには何一つ響かなかった。

「エノーラ…戸惑うな。得意だろ？ 思いつきりやるんだー」

静かに、一向に刑を執行しないエノーラに告げる。その言葉にエノーラは涙を腕で拭い、剣を構え直す。

「ウルエラ…私は君を愛していたよ…」

「俺もだよ」

そう言いきったかは分からない。彼らの小さな告白は民衆の歓声にかき消され、エノーラの涙に流される。民衆達の中には転がり落ちた首を蹴りついたり、踏み潰す者もいた。だが、斬首された裏切り者は笑顔で、その顔が潰れ、肉塊へと成り下がるまで、天を見続けた。

「おい、ここはどこだ。ククーダでもアルマでもないだろう。おい、聞いているのか、半人半馬！」

「今夜は火星が明るい」

「ああ、ダメだ、聞いちやいない」